

# 認知症対応型共同生活介護（認知症グループホーム）で働く介護福祉士に必要な家政学の内容検討

— 介護福祉士への自記式質問票調査の結果から —

Home economics necessary for certified care workers working  
in group homes for people with dementia  
— From the result of survey targeted at certified care workers —

福田 明 上 延 麻 耶\*  
Akira FUKUDA Maya UENOBE

※名古屋経済大学講師（元本学助教）

## 要旨

本研究の目的は、認知症グループホームで働く介護福祉士が仕事上「役立つ」と思う家政学の内容把握を行い、介護福祉士養成教育への配慮事項と卒後研修の内容を検討する際の基礎資料を得ることである。長野県内162の認知症グループホームに質問票を郵送し、回答が得られた85人分のデータを分析した。調査では、旧カリキュラムの「家政学概論」「家政学実習」計68項目について、現在の仕事に「役立つ」～「役立たない」の4段階の選択肢で回答してもらった。

「家政学概論」で「役立つ」と思う人の割合が多かった上位3位は、事故防止（77.6%）、バリアフリーへの対応（70.6%）、加齢・障害と食生活のあり方、栄養障害・生活習慣病（ともに69.4%）であった。「家政学実習」で「役立つ」と思う人の割合が7割を超えた内容は、緊急時連絡（76.5%）、避難誘導（75.3%）、消火（72.9%）、調理実習（71.8%）であった。特に調理実習については、高齢者施設の調査で「役立つ」と思っている人が10.7%と少なかったことから、本調査結果との隔たりがみられた。「高齢者施設での調査結果のなかで役立ち度が低かった内容も、介護福祉士の働く場が異なれば、その役立ち度も高くなる」という仮説を裏付ける一資料になったと思われる。

本研究からは、事故防止、バリアフリー、防災・減災、調理・栄養、室内環境整備に関する内容について、介護福祉士養成教育や卒後研修のなかで、その不足分を補足または強化していく必要性が示唆された。今後は、訪問介護等での調査も行い、介護福祉士に必要な家政学の内容について職場別の比較検討も試みてみたい。

## 【キーワード】

家政学、認知症対応型共同生活介護（認知症グループホーム）、介護福祉士、自記式質問票調査、介護福祉士養成教育

### 1. 研究の背景と目的

2007年11月、社会福祉士及び介護福祉士法が一部改正され、2009年4月から介護福祉士養成校では、新カリキュラムが始まった。それに伴い、家庭生活・食生活・被服生活・住生活から成る、従来のカリキュラム（全1650時間）にあった「家政学概論」（60時間）と「家政学実習」（90時間）はともに姿を消した。そして現在、新カリキュラムの「生活支援技術」のなかを中心に「家政学概論」「家政学実習」の内容がいくつか組み込まれた形となったが、旧カリキュラムに比べると、家政学分野が弱くなってしまったことは否めない。例えば、旧カリキュラムで必修であった調理実習は、新カリキュラムのなかでは必修ではなくなり、それを授業内容として実施するかどうかは各介護福祉士養成校の判断に任せられている。

一方で、認知症対応型共同生活介護（以下、認知症グループホーム）で働く介護職員15人に対して

半構造化面接を行った椎名(2007)によれば、彼(女)らに職務不満感を与える要因として「1人勤務の時間帯が不安」「介護報酬が低い」等に加え、「家事が苦手」という結果も示されり、新カリキュラムとの隔たりがみられた。本来であれば、こうした苦手な仕事内容の克服に向けて「役立つ」教育・研修内容を取り入れることが重要ではなかろうか。田崎・前川(2007)も、家事経験の少ない介護福祉士養成校出身者に家事経験の不足を補うような実習教育が必要であることを指摘している<sup>2)</sup>。

そこで本研究では、認知症グループホームで働く介護福祉士が仕事上「役立つ」と思う家政学の内容把握を行い、介護福祉士養成教育への配慮事項と卒後研修の内容を検討する際の基礎資料を得ることを目的とする。

### 2. 高齢者施設を対象にした研究概要と仮説

筆者らは、昨(2010)年度「高齢者施設（介護老

人福祉施設、介護老人保健施設）で働く介護福祉士に必要な家政学に関する研究」を行った<sup>3) 4)</sup>。質問内容は今回の調査と同一で「家政学概論」と「家政学実習」計68項目に対して、それぞれ現在の仕事への役立ち度を4段階で問うた。

その結果、長野県内の高齢者施設で働く介護福祉士は、個々の利用者に応じた栄養や被服のデザイン等、身体介護を適切に行うために必要な内容および事故防止や室内環境等、日々の仕事のなかで常に配慮しなければならない内容について「役立つ」と思っている傾向が明らかになった。その一方で、献立作成、食材の選び方、食材の調理性、調理操作、調理実習といった調理に関する内容については、「やや役立つ」と思っている人が多い傾向もみられた。特に調理実習については、「役立つ」と思うが10.7%、「やや役立つ」と思うが19.5%にとどまった一方、「やや役立つ」と思うが35.1%、「役立つ」と思うが32.8%を占める結果となった（無回答1.9%）。

しかし、こうした施設ではなく、在宅で暮らす要介護高齢者の間では、調理や買い物等の生活支援ニーズが高いとの報告もある<sup>5)</sup>。そこで筆者らは、「調理等、高齢者施設での調査結果のなかで役立ち度が低かった内容についても、訪問介護や認知症グループホーム等、介護福祉士の働く場が異なれば、その役立ち度も高くなる」という仮説を設定した。

今回の研究は、昨年度に続く「介護福祉士に必要な家政学に関する研究」の第2弾ともいえ、昨年度、提起した仮説に迫る基礎研究としても位置づけていきたいと考えている。

### 3. 対象と方法

#### 1) 調査対象施設とその選定方法

認知症グループホームとは、介護保険制度における地域密着型サービスの1つで、認知症の人が、家庭的な環境と地域住民との交流の下、住み慣れた環境での生活を継続できるよう、定員が5～9人の共同生活を送るものである。その際、介護職員は、利用者の心身の状況に応じて、入浴・排泄・食事・その他の生活支援を行う。居室は、原則個室となっている<sup>6)</sup>。なお、2009年度の新カリキュラムから認知症グループホームでの実習が本学介護福祉学科においても始まっている。

現在、全国に9684の認知症グループホームがある（2009年10月1日現在）<sup>7)</sup>。そのなかで、今回、筆者らは、自分たちが勤務する長野県内にある認知症グループホームを調査対象施設に選定したいと考えた。

そこで、長野県介護サービス情報の公表システム

を利用し、長野県内にある認知症グループホームを検索することにした。この公表システムを利用したのは、①介護保険法で作成が義務付けられ、インターネット上で介護保険法に基づくサービス事業所・施設の情報をほぼ網羅できる点、②年に1回調査が行われ、その情報に基づき年に1度更新されるという情報の新しさ、という2つの理由があげられる<sup>8)</sup>。

#### 2) 調査方法と分析対象

検索した結果、162の認知症グループホームが抽出された（2010年10月29日現在）。この162の全施設に対して質問票を5部ずつ郵送し、そこで働く介護福祉士を対象に自記式質問票調査を実施した（2010年11～12月）。調査票の配布と返信は、施設の管理者・責任者に協力を依頼した。なお、倫理的配慮として、本研究の趣旨説明を質問票に明記し、これに同意を得られる人から匿名で回答を得た。

その結果、質問票の回収数は85票で、そのすべてが有効回答であった。そこで、この85人（女性64人・男性21人、平均年齢34.9±12.7歳）から得られたデータを本研究の分析対象とした。分析対象の主な特徴として、介護職員が58人（68.2%）で最も多かったこと（表1）、現在の職場における勤続年数5年未満の人が59人（69.4%）と約7割

表1 分析対象者の職位

	度数(人)	割合(%)
介護職員	58	68.2
施設管理者・責任者	12	14.1
副主任	10	11.8
介護課長・介護主任	2	2.4
介護支援専門員	2	2.4
その他	1	1.2
合計	85	100

表2 分析対象者の現在の職場における勤続年数

	度数(人)	割合(%)
1年未満	12	14.1
1～3年未満	35	41.2
3～5年未満	12	14.1
5～10年未満	17	20
10年以上	9	10.6
合計	85	100

を占めたこと (表 2), があげられる。

### 3) 調査内容と分析方法

本調査では, 介護福祉士養成課程における旧カリキュラムの「家政学概論」43項目と「家政学実習」25項目の計68項目について, それぞれ現在の仕事に「役立つ」「やや役立つ」「やや役立たない」「役立たない」の4段階の選択肢で回答してもらい, その結果について単純集計を行った(詳細は, 本論文の末尾に掲載した資料1・資料2を参照)。その上で, 「役立つ」と思う内容に焦点をしばって検討した。その理由は, 介護現場での有用性という観点から現在の介護福祉士養成教育や卒後研修に必要な内容を導き出せると考えたからである。具体的には, 筆者らは以下のように考えている。

例えば, 介護福祉士として仕事を行う上で「〇〇をしたい」「〇〇をしなければならない」ことは多くある。そしてそれに対して, 特に問題がなければ, 多くの場合「〇〇は実施可能」で介護福祉士自身も特に悩まなくて済む。しかし, 「仕事で〇〇をしたい, 〇〇をしなければならない」→「しかし, ××が問題だ」となった場合はどうであろうか。ここで重要なのは, 「××の問題があるから, 〇〇をできない」と諦めるのではなく, 「では, どうやって××の問題を乗り越えていくか」→「それには, □□の知識・技術が役立つ」→「だから, □□の知識・技術が必要だ」と考える思考過程である(図1)。つまり, 本調査で「役立つ」と回答された内容(項目)は,

この思考過程で勘案するなら, 介護福祉士にとって必要な知識・技術と判断されたものが多いことになる。

なお, 本研究では, 質問項目のうち, どの項目について「役立つ」と感じる介護福祉士の割合が多いのか, 視覚的にもわかるようグラフで示した。分析には, 統計ソフト SPSS 15.0 を用いた。

### 4. 結果

#### 1) 「家政学概論」の役立ち状況 (図 2)

「家政学概論」43項目で「役立つ」と思う人の割合は, 平均49.6%と約半数を占めた。その中身を見ると, 家族周期(22.4%), 生活設計(25.9%), 財産・消費生活に関する法規(29.4%), 生活費のあり方(31.8%)といった家庭経営・家庭経済に関する内容が約22~30%で下位にとどまった。

それに対し, 事故防止が77.6%, バリアフリーへの対応が70.6%, 加齢・障害と食生活のあり方, 栄養障害・生活習慣病がともに69.4%で上位3位を占めた。以下, 防災(67.1%), 温度, 献立作成(ともに64.7%), 換気, 調理操作(ともに63.5%), 湿度, 採光, 通報設備, 食材の調理性(ともに62.4%), 高齢者・障害者の食生活と調理法(61.2%), 栄養所要量, 食材の選び方(ともに60.0%)と続いた。

これら6割以上を示した項目は, 住居の安全や快適な室内環境, 調理・栄養に関する内容であった。

図1 介護福祉士に必要な知識・技術を導き出す思考過程

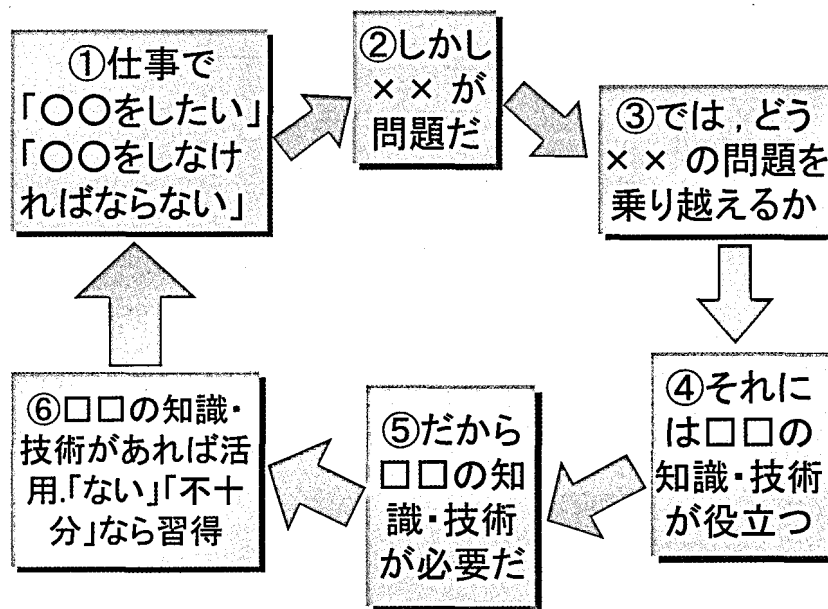
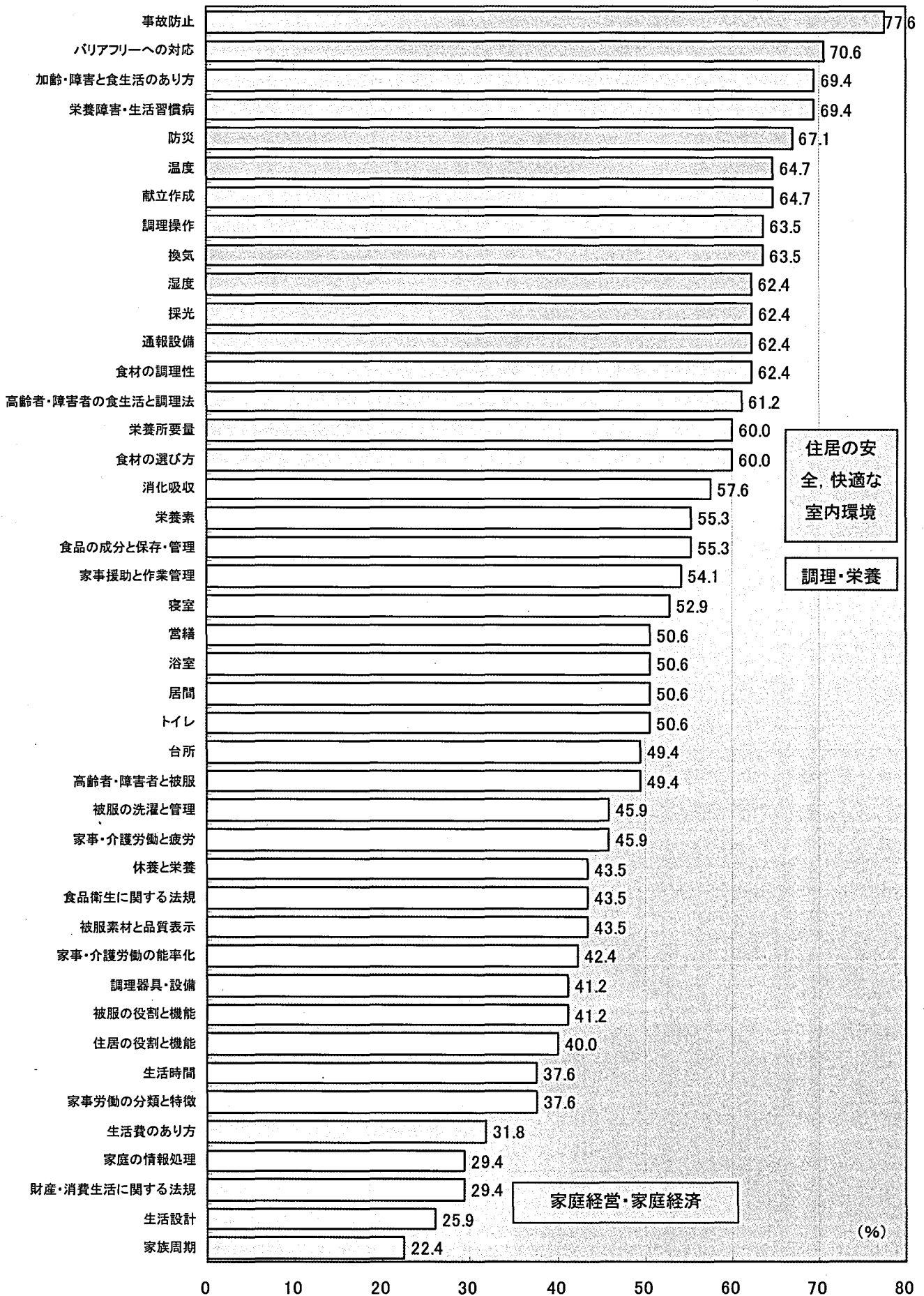


図2 「家政学概論」43項目で「役立つ」と思う内容



2) 「家政学実習」の役立ち状況 (図3)

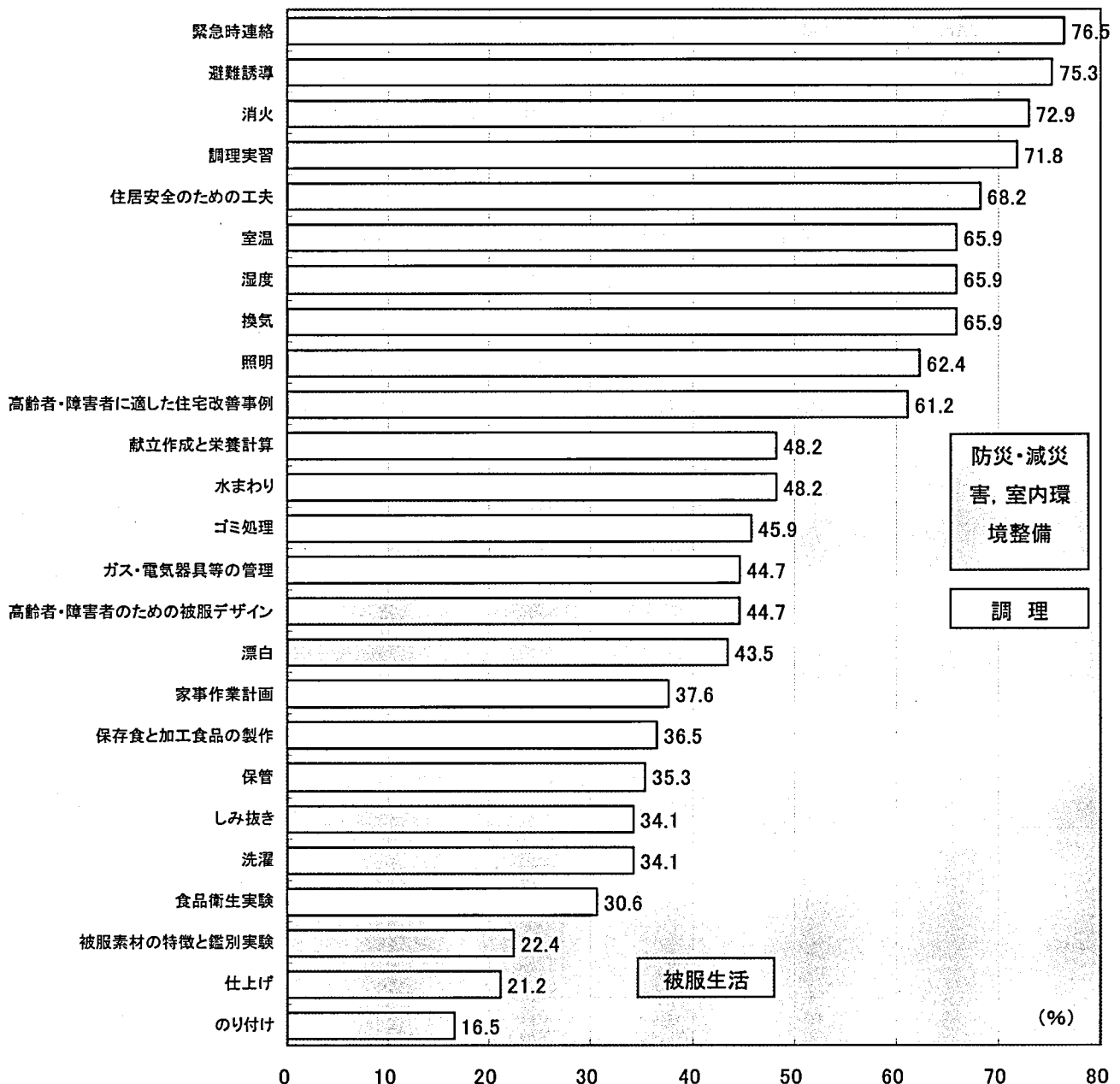
「家政学実習」25項目で「役立つ」と思う人の割合は平均44.7%で、これは「家政学概論」とほぼ同水準であった。その中身を見ると、のり付け(16.5%)、仕上げ(21.2%)、被服素材の特徴と鑑別実験(22.4%)、洗濯、しみ抜き(ともに34.1%)、保管(35.3%)等、被服生活に関する8項目の平均は31.5%にとどまった。

それに対し、住生活に関する12項目の平均は約2倍の62.7%と多かった。特に、緊急時連絡が76.5%、避難誘導が75.3%、消火が72.9%であった。これに調理実習(71.8%)を加えた上位4項目が7割を超えた。さらに、住居安全のための工夫が68.2%と7割に迫る結果となった。以下、室温、湿度、換気(ともに65.9)、照明(62.4%)、高齢者・

障害者に適した住宅改善事例(61.2%)と続いた。

これら6割以上を示した項目は、調理に加え、防災・減災、室内環境整備に関する内容であった。また、項目名で若干の違いはあるにせよ、内容として見たとき、これら上位を占めた項目は、「家政学概論」とほぼ似た結果を示した。

図3 「家政学実習」25項目で「役立つ」と思う内容



## 5. 考察

中川ら（2009）は、介護福祉士養成教育のための家政学を検討するにあたり、実際の介護現場に携わる介護福祉士の考え方を把握することの重要性を指摘している<sup>9)</sup>。筆者らも、この考え方を重視し、今回は高齢者施設、今回は認知症グループホームで働く介護福祉士への質問票調査を行った。今回の調査開始前、文献データベース CiNii と Scholar を使用して、認知症グループホームで働く介護福祉士に必要な家政学の内容を検討した調査・研究があるかどうか検索したが、ともに見当たらなかった（2010年10月5日現在）。したがって、本研究は、その空白部分を埋める役割を果たせた点でも意義があったと思われる。

以下、「家政学概論」と「家政学実習」計68項目のなかで、「役立つ」と思う人の割合が7割を超えた1)「事故防止」「バリアフリーへの対応」、2)「緊急時連絡」「避難誘導」「消火」、3)「調理実習」と、6割以上に多くの項目を占めた4)「室内環境整備」について、なぜ、役立ち度が高かったのか、その理由を中心に考察していく。

### 1)「事故防止」「バリアフリーへの対応」が役立つと思う理由

認知症グループホームも、広い意味から考えると、介護老人福祉施設や介護老人保健施設と同じように、「施設」の一形態であるといえる。その意味で、施設ケアには常に事故の危険性があると指摘されるなか<sup>10)</sup>、「事故防止」とその一防止策である「バリアフリーへの対応」は、介護福祉士にとって役立つ内容であったと思われる。それだけに、事故防止のための能力を介護福祉士養成教育の段階から少しずつ学び得ていくことは、将来、介護福祉士になる学生の可能性を高めることにつながると考える。

例えば、本学介護福祉学科の取り組みにみられるように、事故防止に向けた研修の1つであるKYT（危険予知訓練）について、介護老人福祉施設での取り組み事例を踏まえ、介護福祉士養成教育のなかで展開するのも1つの方法といえる。ちなみにKYTとは、Kiken Yochi Trainingの略で、施設等で事故が起こりそうな場面を描写したイラストを見ながら、そこに潜む危険を探していく研修のことである<sup>11)</sup>。

### 2)「緊急時連絡」「避難誘導」「消火」が役立つと思う理由

2005年の石川県でのファンヒーターによる利用者の火傷事件や2006年の長野県での火災といった認知症グループホームでの相次ぐ事件を契機に、認知症グループホームの防火体制が見直されたことも

12)、「緊急時訓練」「避難誘導」「消火」といった役立ち度を高めたと推察される。また、こうした防災・減災に関する内容の役立ち度は、2011年3月11日の東日本大震災（マグニチュード9.0、最大震度7）や翌3月12日の長野県北部地震（マグニチュード6.7、最大震度6強）、さらには同年6月30日の松本地震（マグニチュード5.4、最大震度5強）の影響に伴い、今後、さらに高まっていくものと思われる。

同時に、介護福祉士養成教育や卒後研修で、防災・減災教育をどういう形で取り入れ、どのような方法で実施していくかも重要な課題といえる。参考までに、長野県にある介護老人福祉施設「ともしび」での職場内研修の取り組み例を紹介しておく。

介護老人福祉施設「ともしび」では、「抜き打ちの緊急訓練」を研修の一環として実施している。この「緊急訓練」では、目の前に人形が倒れており、その人形を「利用者だ」と思って、勤務中にその人形と出会った介護職員は、決して無視せず、救命救急訓練を行わなければならない。施設長によれば、こうした研修は、介護職員の危険を察知する感性を磨くとともに、仕事の慣れから生じる気持ちの弛みを抑えることにも役立つ、とのことである<sup>13)</sup>。

### 3)「調理実習」が役立つと思う理由

認知症グループホームでは、家庭的な雰囲気を大切にしている取り組みの1つとして、利用者とともに介護福祉士が調理する機会も多い。しかし、認知症の利用者も得意だった調理はできる可能性があるにもかかわらず、介護福祉士がそれをできないと、その可能性を弱めてしまう場合も考えられる。

例えば、野菜を切る、炒める、味付けする、皿に盛る、といった個々の工程については行える利用者が多い。しかし、認知症（特にアルツハイマー型認知症とレビー小体型認知症）の実行機能障害等でそれらをすべて1人で行っていくことは難しいため<sup>14)</sup>、介護福祉士が個々の工程をつなぎ、1つの料理としてまとめていく役割を担う必要が生じる。

したがって、介護福祉士は、その作る料理の全体像を把握し、利用者の能力を活かす環境を整えられるようにしておくことが大切であるといえる。永田（2009）も、認知症グループホームで生活する利用者の「リズムある暮らしの継続」のためには、「得意なことをする」とともに、「能力をつぶさない環境」等のケアプロセスが大切であることを指摘している<sup>15)</sup>。

また、こうした調理も含めて、介護福祉士にとっては食事支援の頻度は高く、生活支援のなかで重要な位置にあることも結果に表れたと思われる。それ

だけに、生活体験の個人差が大きい学生の生活技術向上を目的に、1966年から毎年、献立作成や調理等をプログラム化した2泊3日の宿泊実習を実施している甲子園短期大学の取り組みは1つの参考になる<sup>16) 17)</sup>。

#### 4) 「室内環境整備」が役立つと思う理由

「温度」「湿度」「換気」「採光」といった身の回りの環境整備は、日々の仕事のなかで行われるため、その重要性を認識しやすかったと考えられる。

例えば、インフルエンザウイルスは比較的乾燥に強く、人も乾燥状態が続くと喉や気管支の防御機能が低下するため、インフルエンザウイルスに感染しやすくなる。したがって、乾燥しやすい冬季を中心にインフルエンザウイルスによる感染を防ぐ1つの方法として室内では加湿器を利用し、適正な湿度(概ね相対湿度40%以上)を保つことが重要である。なお、相対湿度は、その空気を含むことができる最大の水分量に対する実際に含まれている水分量の割合(%)を示す。

また、認知症の利用者のなかには、自宅や他施設といった以前の環境と異なる環境だと、精神的に不安定になる人もいる。その点について潘ら(2011)も、リビングを中心とした環境整備が認知症の利用者の無意味な行動を軽減させることが見出されていることから、環境整備が求められると指摘する<sup>18)</sup>。

したがって、介護福祉士は、施設内の「温度」「湿度」「採光」といった環境にも配慮し、利用者の安全や健康管理に加え、利用者が心地よいと感じる空間づくりにも努めていく必要があるといえる。

#### 6. まとめと今後の課題

本論文では、認知症グループホームで働く介護福祉士が仕事上「役立つ」と思う家政学の内容把握とそれに対する考察を行ってきた。以下、全体をまとめ、今後の課題について述べる。

介護福祉士養成課程における新カリキュラムの導入で「家政学概論」「家政学実習」が消えた。しかし、本調査結果からは、認知症グループホームで働く介護福祉士の多くが、①「事故防止」「バリアフリーへの対応」、②「緊急時連絡」「避難誘導」「消火」、③「調理実習」、④「室内環境整備」といった家政学の内容について現在の仕事に「役立つ」と思っている傾向が明らかになった。

したがって、今後、こうした事故防止、バリアフリー、防災・減災、調理・栄養、室内環境整備に関する内容について、介護福祉士養成教育や卒業研修のなかで、その不足分を補足または強化していく必要があると思われる。具体的には、まず、これらの

家政学の知識・技術について、それぞれの介護福祉士養成校で各授業内容を把握した上で、どの科目で、どのように補足または強化していくべきか、検討することが望ましいといえる。

また、「調理実習」については、前回の高齢者施設での調査では、「役立つ」と思っている人が少なく、「やや役立つ」と思っている人が多い傾向にあったことから、本調査との隔たりがみられた。このことから、「高齢者施設での調査結果のなかで役立つ度が低かった内容についても、訪問介護や認知症グループホーム等、介護福祉士の働く場が異なれば、その役立つ度も高くなる」という仮説を裏付ける一資料になったと思われる。

今後は、訪問介護、通所介護等、前回の高齢者施設や今回の認知症グループホームとは異なる職場環境で働く介護福祉士への調査も行っていく予定である。その上で、介護福祉士にとって必要な家政学の内容について職場別の比較検討も試みてみたいと考えている。その理由は2つある。

1つめは、介護福祉士養成校で必要と思われる家政学の内容を授業でとりあげる場合、ただ単に一律の内容を学生に伝えることを避けることにつながる点である。職場別に比較検討することで、共通して学生に伝えたい内容と、職場別に強調して伝えたい内容が明確となり、実習や学生の将来を見据えた授業を展開することができると思われる。

2つめは、卒業研修に役立つという点である。前回は高齢者施設を、本論文では認知症グループホームをとりあげたが、今後、多様な職場を調査・研究していくことで、現在、自分が働いている職場では、家政学のなかでも特にどのような内容が必要とされているのか、という傾向を介護福祉士自身が把握する機会になると思われる。そしてその把握した内容に基づき、卒業研修を企画してみてもどうか。卒業研修で何をテーマにとりあげたらよいか、迷っている場合の1つの判断材料になる。

以上を踏まえ、今後、総合的な観点から介護福祉士に必要な家政学の内容について検討していくことが重要であるといえる。あわせて、本テーマに関する調査・研究が活性化することを期待したい。

#### 謝辞

未筆ながら、本調査・研究にあたり、ご協力くださった認知症グループホームで働く職員の皆様に心より感謝申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 椎名知づる：認知症高齢者グループホームにおける介護職員の職務満足感－Hertzbergの2要

- 因理論による検討. 社会福祉学研究, 第2号: 49 (2007).
- 2) 田崎裕美・前川有希子: 介護福祉のための家政学教育－食生活領域. 静岡福祉大学紀要, No.3: 73－80 (2007).
  - 3) 上延麻耶・福田明: 高齢者施設で働く介護福祉士に必要な家政学に関する研究－家庭生活, 食生活, 被服生活. 松本短期大学研究紀要, 第20号: 3－8 (2011).
  - 4) 福田明・上延麻耶: 高齢者施設で働く介護福祉士に必要な家政学に関する研究－住生活分野. 松本短期大学研究紀要, 第20号: 53－59 (2011).
  - 5) 田村順子・田中智子: 在宅介護高齢者の生活支援のあり方に関する研究－東大阪市における事例調査. 日本家政学会誌, 56 (5): 333－341 (2005).
  - 6) 厚生労働省: 第5章 認知症対応型共同生活介護. 指定地域密着型サービスの事業の人員, 設備及び運営に関する基準, 厚生労働省令第131号 (2011. 10. 20 改正).
  - 7) 厚生労働省: 平成21年介護サービス施設・事業所調査 (2011. 2. 17).
  - 8) 福田明・上延麻耶: 高齢者施設で働く介護福祉士に必要な家政学に関する研究－住生活分野. 松本短期大学研究紀要, 第20号: 54 (2011).
  - 9) 中川英子・神部順子・奥田都子ほか: 生活支援と家政学－新カリキュラムにおける家政学教育の課題. 介護福祉学, 16 (2): 207 (2009).
  - 10) 橋本正明: 高齢者介護施設における福祉サービスとリスクマネジメント. 立教大学コミュニティ福祉学部紀要, 第9号: 40 (2007).
  - 11) 福田明・斎藤真木: 介護福祉士養成教育におけるKYT (危険予知訓練) の導入とその効果－高齢者施設における介護職員へのKYTの取り組み事例を踏まえて. 松本短期大学研究紀要, 第20号: 61－74 (2011).
  - 12) 永田千鶴: グループホームにおける認知症高齢者ケアと質の探究. ミネルヴァ書房, 11 (2009).
  - 13) 福田明: 介護職員の卒後教育・研修の実態と取り組みに関する研究. 日本福祉大学大学院社会福祉学研究科福祉マネジメント専攻修士学位請求論文, 課題論文③: 51－52 (2008).
  - 14) 山田律子: 認知症の人の食べる喜びに向けて－脳機能を踏まえた食事ケア. 第2回日本認知症グループホーム大会報告集, 日本認知症グループホーム協会, 42, 47 (2011)
  - 15) 永田千鶴: グループホームにおける認知症高齢者ケアと質の探究. ミネルヴァ書房, 123 (2009).
  - 16) 新宅賀洋・守野美佐子, 原田理恵ほか: 甲子園短期大学生の生活実態調査. 甲子園短期大学紀要, No.24: 67－82 (2006).
  - 17) 新宅賀洋・落合利香・永藤清子: 介護職員に求められる生活技術の実態調査. 介護福祉教育, 第15巻 第2号: 77－78 (2010).
  - 18) 潘娜・新田静江: 認知症対応型共同生活介護（グループホーム）における実践と研究に関する文献レビュー. Yamanashi Nursing Journal, Vol.9 No.2:9 (2011).

#### 参考文献

鷹野和美: チームケア論－医療と福祉の統合サービスを目標して. ぱる出版, 71－75 (2008).

#### 参考サイト

東京都健康安全研究センター: ぐらしの健康 Web 版－インフルエンザ予防のために室内の湿度管理が重要です! (2011. 12. 27 更新).



資料1

N=85

「家政学概論」各43項目（平均49.6）の役立ち度の割合の結果

数値は%を示す

家庭生活	大項目	家庭経営	家庭経営	家庭経済	家庭管理	家庭経済	家庭管理	家庭管理	家庭管理	家庭管理	家庭管理	家庭管理	11項目
	小項目	家族周期	生活設計	財産・消費生活に関する法規	家庭の情報処理	生活費のあり方	家事労働の分類と特徴	生活時間	家事・介護労働の能率化	休養と栄養	家事・介護労働と疲労	家事援助と作業管理	平均
	役立つ	22.4	25.9	29.4	29.4	31.8	37.6	37.6	42.4	43.5	45.9	54.1	36.4
	やや役立つ	36.5	37.6	32.9	32.9	32.9	32.9	37.6	34.1	37.6	29.4	28.2	33.9
	やや役立つたない	25.9	22.4	21.2	22.4	20.0	15.3	11.8	15.3	11.8	15.3	8.2	17.2
	役立つたない	12.9	14.1	16.5	12.9	15.3	14.1	11.8	8.2	7.1	9.4	9.4	12.0
	無回答	2.4	0.0	0.0	2.4	0.0	0.0	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5

食生活	大項目	調理器具・設備	食品衛生に関する法規	食品の成分と保存・管理	身体の機能と栄養	身体の機能と栄養	調理	高齢者・障害者と栄養	高齢者・障害者の食生活と調理法	調理	調理	調理	食生活と健康	高齢者・障害者と栄養	13項目
	小項目				栄養素	消化吸収	食材の選び方	栄養所要量		食材の調理性	調理操作	献立作成	栄養障害・生活習慣病	加齢・障害と食生活のあり方	平均
	役立つ	41.2	43.5	55.3	55.3	57.6	60.0	60.0	61.2	62.4	63.5	64.7	69.4	69.4	58.7
	やや役立つ	31.8	34.1	34.1	35.3	35.3	28.2	29.4	29.4	30.6	28.2	24.7	22.4	24.7	29.9
	やや役立つたない	21.2	12.9	2.4	7.1	3.5	9.4	7.1	5.9	4.7	5.9	8.2	4.7	3.5	7.4
	役立つたない	4.7	9.4	3.5	1.2	3.5	2.4	3.5	3.5	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	3.3
	無回答	1.2	0.0	4.7	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	0.0	0.6

被服生活	大項目	被服の役割と機能	被服素材と品質表示	被服の洗濯と管理	高齢者・障害者と被服	4項目
	小項目					平均
	役立つ	41.2	43.5	45.9	49.4	45.0
	やや役立つ	35.3	32.9	34.1	28.2	32.6
	やや役立つたない	12.9	15.3	11.8	11.8	12.9
	役立つたない	9.4	8.2	8.2	10.6	9.1
	無回答	1.2	0.0	0.0	0.0	0.3

住生活	大項目	住居の役割と機能	生活行動と生活空間	生活行動と生活空間	生活行動と生活空間	生活行動と生活空間	生活行動と生活空間	住居の管理と安全	住居の管理と安全	快適な室内環境	快適な室内環境	快適な室内環境	快適な室内環境	住居の管理と安全	高齢者・障害者と住居	住居の管理と安全	15項目
	小項目		台所	トイレ	居間	浴室	寝室	営繕	通報設備	採光	湿度	換気	温度	防災	バリアフリーへの対応	事故防止	平均
	役立つ	40.0	49.4	50.6	50.6	50.6	52.9	50.6	62.4	62.4	62.4	63.5	64.7	67.1	70.6	77.6	58.4
	やや役立つ	35.3	40.0	38.8	40.0	40.0	37.6	34.1	25.9	28.2	31.8	30.6	29.4	22.4	20.0	17.6	31.5
	やや役立つたない	15.3	7.1	7.1	5.9	5.9	5.9	8.2	7.1	4.7	1.2	1.2	1.2	5.9	3.5	2.4	5.5
	役立つたない	7.1	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	7.1	4.7	4.7	4.7	4.7	4.7	4.7	5.9	2.4	4.2
	無回答	2.4	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5

資料2

「家政学実習」各25項目（平均44.7）の役立ち度の割合の結果

N=85  
数値は%を示す

家庭生活	大項目	家事作業計画	1項目
	小項目		平均
	役立つ	37.6	37.6
	やや役立つ	37.6	37.6
	やや役立たない	11.8	11.8
	役立たない	12.9	12.9
	無回答	0.0	0.0

食生活	大項目	食品衛生実験	保存食と加工食品の製作	献立作成と栄養計算	調理実習	4項目
	小項目					平均
	役立つ	30.6	36.5	48.2	71.8	46.8
	やや役立つ	37.6	40.0	28.2	21.2	31.8
	やや役立たない	18.8	16.5	14.1	2.4	12.9
	役立たない	12.9	5.9	9.4	4.7	8.2
	無回答	0.0	1.2	0.0	0.0	0.3

被服生活	大項目	被服管理実習	被服管理実習	被服素材の特徴と鑑別実験	被服管理実習	被服管理実習	被服管理実習	被服管理実習	高齢者・障害者のための被服デザイン	8項目
	小項目	のり付け	仕上げ		洗濯	しみ抜き	保管	漂白		平均
	役立つ	16.5	21.2	22.4	34.1	34.1	35.3	43.5	44.7	31.5
	やや役立つ	38.8	41.2	38.8	34.1	34.1	40.0	35.3	32.9	36.9
	やや役立たない	28.2	23.5	20.0	24.7	24.7	14.1	12.9	12.9	20.1
	役立たない	16.5	14.1	15.3	7.1	7.1	10.6	8.2	9.4	11.0
	無回答	0.0	0.0	3.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4

住生活	大項目	住居管理	住居管理	住居管理	高齢者・障害者に適した住宅改善事例	室内環境整備	室内環境整備	室内環境整備	室内環境整備	防災	防災	防災	防災	12項目
	小項目	ガス・電気器具等の管理	ゴミ処理	水まわり		照明	換気	湿度	室温	住居安全のための工夫	消火	避難誘導	緊急時連絡	平均
	役立つ	44.7	45.9	48.2	61.2	62.4	65.9	65.9	65.9	68.2	72.9	75.3	76.5	62.7
	やや役立つ	34.1	31.8	30.6	20.0	29.4	27.1	27.1	28.2	25.9	22.4	18.8	18.8	26.2
	やや役立たない	12.9	16.5	14.1	11.8	5.9	5.9	5.9	4.7	3.5	2.4	3.5	3.5	7.5
	役立たない	7.1	4.7	5.9	5.9	2.4	1.2	1.2	1.2	2.4	2.4	2.4	1.2	3.1
	無回答	1.2	1.2	1.2	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4